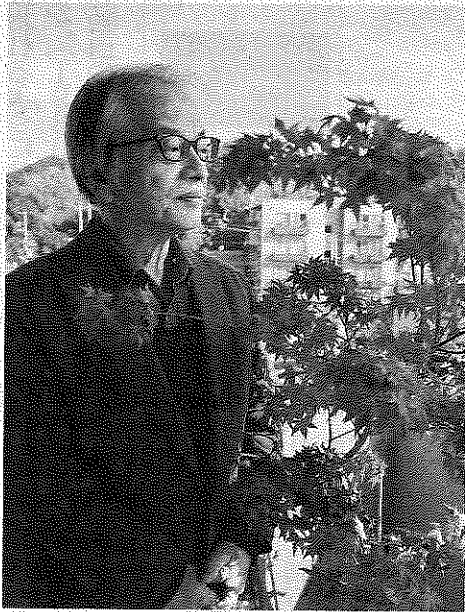


本

よみうり堂

■「中国文学逍遥」全3冊

井波 陵 一 さん



著者来店

今回の「来店者」は、著者ではなく、編者だ。中国古典の翻訳からエッセイまで幅広く手がけた中国文学者で、2020年に76歳で亡くなった井波律子・国際日本文化研究センター名誉教授。単行本未収録の作品が3冊本として刊行された。夫で中国文学者の井波陵一・京都大名誉教授が編集した。

「あらためてその声に聞き入りながらともに過ごしたいという、まったく私的な動機」でデータ化していたが、一字一字入力作業を続けるなかで「レトリックから見た中野重治」（3冊目所収）など思いがけない原稿の「発掘」もあ

亡き妻の筆 伝える役目

り、旧知の編集者から勧められ、公刊を決めた。

1冊目「時を乗せて 折々の記」はエッセイで構成され、富山・高岡で過ごした幼い日々や京都に移り住んでからの暮らしをつづるなど、自分史の趣。2冊目「汲めど尽きせぬ古典の魅力」は、個人全訳した『世説新語』『三国志演義』『水滸伝』論語ほか、中国文学が対象。3冊目の『楽しく漢詩文を学ぼう』は、インタビューと講演が中心で、中国文学の面白さを伝え続けた闊達な語り口がよみがえる。

編集して、「亡き妻の」多岐にわたる文章をつづっていた筆力に驚かされた」という。

今秋はさらに、読売新聞掲載のエッセイを軸にした『新版 一陽来復』が岩波現代文庫に入るなど、既刊の文庫化が相次ぎ、ファンの根強い支持がうかがえる。

自宅からは「京都五山送り火」で知られる大文字山がよく見える。亡き妻は、この風景が好きだったという。「亡くなった後、とにかく井波律子のために生きようと思っただ。書いたものを多くの人に伝えることが大切な役目だ」と語る。京大生時代に学部の後輩として出会ってから、来春で50年。2人はいまも共に時を重ねている。（本の泉社、各2530円） 泉田友紀